

5 P-3

談話中の知覚・感覚文*

武藤 伸明 中川 裕志

横浜国立大学 工学部

1 導入

感覚を表す文の語用論的な性質の一つとして、本稿では例えば「面白かった」「面白く感じた」という、感覚を表現する2つの形式について考える。この2つの表現は似ているように見えるが、幾つかの場面で異なった用法をされる。本稿では、この用法の異なる例を挙げると共に、前者は感覚の主観的表現であり後者は客観的表現であるという考え方からその用法の違いを説明する。

2 感覚の主観的表現, 客観的表現

感覚とは個人の内面にあるものであり、本来外部の人間によって観測、表現することはできないものであるということが言われてきた[Mik60, Nak91]。 “面白い”という感覚を表すのに、「面白かった」は最も普通に使われる表現であるが、これは発話者が自分自身の感覚を言う場合にしか使えず(1)(3)、他人の感覚を表そうとする場合には使えない(2)(4)。

- (1) 僕はその映画が面白かった。
- (2) *彼はその映画が面白かった。
- (3) 僕はこの前鰻を食べたとき美味しかった。
- (4) *彼はこの前鰻を食べたとき美味しかった。

即ち「面白かった」という表現は話者が自己を表現する為の、極めて主観的な言い方である。

[Mik60]は「第3者の感情は(話者には)直接には経験できないわけであるから、動詞を使って表現するのが望ましい」と述べている。動詞は他人の行為を表しており、行為は外部の人間によって観察可能であるからである。例えば「面白がった」は第3者に対して適用可能である。

- (5) 彼はその映画を面白がった。

「面白がった」は他人の行為とそれを観察する話者という構図を前提に置いた、客観的な表現であるといえる。従って「面白がった」は通常の談話では話者には適用されず、次のような言い方はあまりされない。

- (6) 私はその映画を面白がった。

ここで“面白い”という感覚に対する別の表現、「面白く感じた」について考えてみる。「面白く感じた」という表現は、行為の表現ではなく内的感覚の表現であるにも関わらず話者≠感覚者の場合にも使用できる。

- (7) 彼はその映画を面白く感じた。

このように「面白く感じた」という表現が客観的に使い得るのは、「面白く感じた」が“面白い”という感覚をあたかも“面白く感じる”という準行為化して表現していることに起因すると思われる。「面白かった」「面白がった」「面白く感じた」の用法を以下にまとめる。

	誰の何を表現するか		主観 / 客観
面白かった	話者	感覚	主観的
面白がった	話者以外	行為	客観的
面白く感じた	誰にでも使用可	感覚	客観的

感覚が主観的に表現された場合(例えば「面白かった」で表現された場合)、その感覚対象は感覚者=話者から主観的に見た物事でなくてはならないと考えられる。

- (8) この前鰻を食べたとき美味しかった。

文(8)は適格文である。When-clauseは発話者自身の経験(行為)を表し、主節の感覚文が主観的表現であるからである。ところが、次の2つの文は不適格な文である。

- (9) *この前鰻を食べているとき美味しかった。
- (10) *この前鰻を食べていたとき美味しかった。

文(9)(10)は、when-clause¹が「～している/いた」で示される客観的記述、即ち第3者についての観察の記述になっているのに対して、主節は主観的表現であるからである。このとき、主節を「面白く感じた」を用いて客観的表現にすると、文(11)のように適切な文になる。

- (11) この前鰻を食べているとき美味しいと感じた。
- (12) *彼が旅行に行ったとき面白かった。

文(12)は、「面白かった」の感覚者を話者と考えても“彼”と考えても不適格な文である。

- (13) 彼が旅行に行ったとき面白く感じた。

¹接続詞「とき」でマークされる従属節を、本稿では when-clause と呼ぶ。

これに対して文(13)からは、彼が旅行に行ったという事実に対して話者が面白く感じたという読みが得られる。彼が旅行に行ったというのは、誰からでも(少なくとも話者からは)観察可能な客観的な事実である。その客観的事実に対して、客観的表現を用いれば感覚を表すことができる。結局、1つの文の中で主観表現と客観表現が混在することは、談話としてあまり適切ではないということがいえる。

3 感覚の event 化

感覚に対してそれを一種の行為とみなすことによって客観的表現にし得るわけであるが、これを行なった為に本来時間的に継続的(=state)であることもできる“感覚”が、行為のように時間的に瞬間的(=event)とみなされてしまう現象が生じる。

(14) この前旅行に行ったとき面白かった。

文(14)は主観的表現であり、旅行という期間内での話者の感覚(というよりもむしろ話者の感情という言葉を用いた方が妥当であろう)を述べているものとして解釈される。

(15) この前旅行に行ったとき面白く感じた。

客観的表現、文(15)からは、旅行期間内での或る時点に於いて何かの物事に対して話者が面白く感じたという意味合いを感じる。

このような感覚の event 化がもたらす現象を1つ挙げる。接続詞「とき」でマークされる従属節=when-clauseと、感覚を表す主節から成る文を考える。このとき when-clause に副助詞「は」を付けた場合、この「は」はどんな意味合いを表すであろうか?

主語をマークする「は」については、主題と比較対象の2つの用法があることが言われてきた[Kun73]。When-clause に「は」を付けた場合にも、「は」は主題又は比較対象の意味を表す。但し、その「は」が主題を表すか比較対象の意味になるかは、感覚文が主観的表現であるか客観的表現であるかによって異なる。

主観的感覚文では、when-clause は「は」によって主題として取り立てられる。

(16) この前旅行に行ったときは面白かった。

(17) この前映画を見たときは面白かった。

このとき、主題化によって when-clause によって表される状況がクローズアップされるので、文は when-clause が表す状況内での感覚者の感情を表すという色彩が非常に濃くなる。文(17)を(18)と比較してみよう。

(18) この前映画を見たとき面白かった。

文(18)は普通「映画が面白かった」と読まれる。² ところが when-clause に「は」を付けることにより、文(17)は

² “面白い”という感覚と“映画”が我々の常識知識によって強く結び付くからであろう。

映画が面白かったという読みから、映画を見た状況が面白かったという読みに移行する。

ところがこれを客観的感覚文について見ると、when-clause を「は」でマークすると、その「は」は比較対象の意味合いを表すようになる。

(19) この前映画を見たときは面白く感じた。

(20) この前映画を見たときは楽しく感じた。

上の2文では、感覚の対象は映画であると読まれ、映画を見た状況が面白かった/楽しかったという読みは生じない。また、「別のときに見た映画はつまらなかった」という比較対象の含意が生じる。

この理由については次のように考えられる。先に、「面白く感じた」は準行為化によって event と見做される、即ち「は」によってマークされた「映画を見たとき」という状況、或いは期間は「面白く感じた」の対象となれないと述べた。従って「映画を見たとき」は、感覚対象=文の主題と成り得ず、「は」は主題ではなく比較対象を表すものとして解釈される。

4 結尾

感覚者の内面に在り主観的に表現しなければならない感覚について、それを準行為化することによって客観的表現することができることを述べた。また、その準行為化によって感覚が event と見做されるようになる現象を挙げた。When-clause に「は」を付ける現象で見た通り、従属節に少しの変更を加えただけで主節の感覚が何を対象にしているかの読みは変わる。談話の中に感覚文が現れるとき、その感覚文の主語や目的語は頻繁に省略される。この省略要素を求めようとする為には、感覚文と周囲の談話の作用の仕方を知る必要がある。今回は when-clause との関わりについて述べたが、このような関わりをいろいろな修辭関係について調べることは今後の課題である。

参考文献

- [IS88] Masayo Iida and Peter Sells. Discourse factors in the binding of zibun. In W. Poser, editor, *Japanese Syntax*, pp. 23-46. CSLI, 1988.
- [Kun73] 久野すすむ. 日本文法研究. 大修館書店, 東京, 1973.
- [Mik60] 三上章. 付録一 彼女ヲ好きナ彼. 象は鼻が長い, pp. 189-204. くろしお出版, 東京, October 1960.
- [Nak91] Hiroshi Nakagawa. Agent and point of view in Japanese. draft, 1991.